

韓国の民主化運動および金芝河救援運動への メキシコからの連帯

アルフレド・ロメロ=カスティージャ

時が流れ、金芝河の背後にあった思想を考えながら、私はこの短い証言の執筆が始められると感じた。1970年代はじめの5年間の間私のところに韓国の民主化の動きが伝わりはじめ、私はメキシコシティから韓国の政治的権利を守ろうという宣言を発した支持組織に協力することをどのように受け入れ、また民主化運動に理があると主張した韓国の詩人の金芝河を守るためにどのように動き出したか、この論文をつうじて理解してもらえれば幸いだ。韓国の政治的権利と金芝河支持は韓国の民主化を望む熱を支持するメキシコからの連帯のネットワークを作り出すことに成功した。この行動に併せて、私が富山妙子のオーディオビジュアル作品『しばられた手の祈り』のスペイン語版翻訳グループに参加した経緯がある。

あの時の経験を引き出すのに併せて、1967年、私は韓国外国語大学の留学生としてソウルの地を踏んだ時のことを思い出す。私は1945年以降、国内の分断、兄弟同士の戦争、独裁政権と戦ってきた民衆の歴史をより深く知ることを目的にソウルにやってきた。そして、私に許される限り当時の朝鮮半島とその民衆のあらゆる情報を集める必要に私は駆られていた。はじめに私はハンゲルの学習にあて、それと同時に、私を取り巻く社会環境、そこでは私の隣人たちが日常生活を送り最も近い社会セクター、つまり大学生たちが特殊な形で生活を送っていた場所の観察を進めていた。

幸いにも私は至るところで変化の風が感じられた韓国社会の変容のプロセスに立ち会うことができた。大人たちは過去の苦難を乗り越えるため、来るべき未来のために仕事に打ち込んでいるように見えた。一方で、大学生たちといえば、前に進もうという強い意図は見えたものの、社会的良心の片鱗も見せていないように思えた。

しかし、この大学生たちに感じた最初の印象は、学生たちの生活を脅かした幾多の出来事を理解するうちに消え去っていった。そのころ、1960年4月には当時大統領であった李承晩政権の選挙違反への学生抗議が起こった。彼は政権から降りなければならなかった。学生たちの勝利は学生運動の萌芽となったが、その直後に起こった朴正熙首班のクーデターにより失敗に終わった。

この運動は大韓民国と日本の国交正常化に反対する抗議活動で再び息を吹き返したように思われたが、1965年の合意署名を阻止することはできなかった。その時から、大学および学生たちへの政権による取り締まりが、さらに過激なものになった。それこそが、政治的な意見の自由な発言をあらかじめ禁じられた学生たちの無気力の原因だった。この沈黙は、1970年代から再び破られるようになる。

私の最初の留学期間はとても早く過ぎ去っていった。1970年、私はメキシコに戻り、メキシコ国立自治大学（UNAM）の教授になると、のちに「漢江の奇跡」と呼ばれるようになる現象の本当の担い手である労働者、農民、労働のために徴発された若い女性、周縁的な人びとが置かれた不正に満ちた状況を訴える複数のグループからの抗議のニュースを受け取るようになった。

この1970年代初頭の抗議の状況の中で、金芝河の姿が現れた。1972年、私の郵便受けに、当時まだソウルに住んでいたノーマン・ソーブ（Norman Thorpe）から一通の郵便が届いた。その郵便には、彼がそのほかの若い同僚たちと参加していた出版プロジェクト、つまり雑誌“Ronin”が入っていた。私の記憶が確かならその雑誌は香港で出版されていたはずだ。その数日後には第二号が届けられ、朴正熙独裁政権下で行われていた弾圧行為を伝えるものだった。紙面の中心部には金芝河の写真とバイオグラフィーが添えられ、続いて金芝河の詩の英語訳が掲載されていた。それが金芝河の名前を知った最初の出来事だった。

プロフィールには1941年、全羅南道の木浦に生まれたと書いてあった。その地域性が彼の詩に根付いているようだった。経済発展からは排除された地方であり、過去には農民反乱や、社会不満を露にする抗議活動が行われていた場所だ。この歴史的な蓄積が金芝河の詩を特徴づける社会的背景だ。

金芝河はソウル大学校美学科を卒業後、1964年には大韓民国と日本の国交正常化の交渉に反対する運動に参加し始める。それにより拷問を受け刑務

所に収監される。1965年に釈放されると精力的にその国交正常化反対運動に参加し始める。

1970年に、当時影響力のあった文芸誌に『五賊』を発表した。それは、朴正熙政権の5つの組織で働かれていた権力乱用を寓話的に表現したものであった。この詩が野党の中で複製されると、「反共法」に違反したとみなされ、新聞社の閉鎖および、金芝河の再度の収監を招いた。出所の三か月前、詩のアンソロジー『黄土』が出版され、彼は詩を書き続ける。1972年、カトリック系の雑誌『創造』に『蜚語』を発表する。至るところで流れ、異なる問いを投げかける奇妙な音の出どころを探し出すという部分から始まる諷刺詩である。その音は音楽作品の序曲の旋律のようになり、徐々に韓国の独裁政権によって行われた悪事へと至る道を描き出す。

警察の追跡を逃れる目的で、金芝河はソウルを去り、彼の生まれた全羅南道の都会から離れた農村部で避難する場所を探した。そこでの放浪の生活が、結果的に起訴、逮捕、また馬山の精神病院への監禁へと導いてしまった。彼の勾留と酷い扱いに対し1972年の5月、日本で抗議の声が上がり、そこから、金芝河釈放のための運動が米国やヨーロッパの著名な知識人グループまで伝わっていった。彼らは韓国政府に、抑圧的な行動を終えるように要求した。この仲介の声により、1972年7月18日、金芝河は釈放された。

1974年、金芝河の『民衆の声』が出版される。その出版のせいで、またしても逮捕される。今回は学生たちの反体制グループを支援し、また朴正熙政権に反対する抗議活動の団体を煽動した罪で検挙された。そこで死刑が宣告された。この告発の本当の理由は、政権の腐敗を攻撃する彼の詩の内容にあった。

政権に対する不満を露にしていた学生、作家、ジャーナリスト、宗教指導者らの人権を認めず、投獄や拷問を行うのが主流だった政府の不寛容さに加えて、1972年10月に布告された、維新憲法と呼ばれる憲法に、自らの権力を不動のものとする朴正熙の意図が表れている。

物事はこのように進んでいた。もう一度メキシコの話に戻ろう。1975年の春に重要な出来事が起こった。エル・コレヒオ・デ・メヒコ大学院大学に客員教授として日本の作家大江健三郎がやってきたことだった。彼は大学院大学で現代日本文学の講座を持っていた。この講座は日本研究の修士課程の一部であったが、講義者の文学的な重要性を鑑み、日本研究に関係するほか

の分野の学者にも広く門戸が開かれていた。彼の講演を聞くために、メキシコシティのローマ地区にある古い建物であったエル・コレヒオ・デ・メヒコ大学院大学の授業を再び受けさせてもらえるようになった。

大江は多種多様な大学人が聴衆となっていることをとても喜んでいて。私たちに自身の名前と何を研究しているか尋ねていた時、私が朝鮮の歴史を学ぶためソウルにいたと伝えると、彼の注意を惹いたようだ。一度日本文学のテーマをめぐる解説が進むと、大江は私たちに桁外れの提案をした。それというのは、金芝河、若い韓国の詩人に捧げる講義をするというものだった。金芝河は彼の詩の批判的なトーンによって政府からの抑圧の対象となっていたことから、当時大きな注目を集めていた。

私が浅い知識しか持っていなかった韓国の詩人について大江が私たちに伝えようとした意図は、鄭仁燮教授*のソウル外大の文学の授業で受けた心地よい喜びを思い起こさせた。鄭教授は以下のように語っていた。現代のハンゲル文学は伝統的な方法論から離れ、ジャンルの様々な壁を越え混沌としたものとなっている。そうでありながら、過去からの遺産として、その表現の率直さが繁栄を助けることになるだろう、と。

鄭教授はこう付け加えた。植民地時代の朝鮮文学作品は日本が交戦中の間、行き詰まりの状態に入っていた。1945年以降新たな空気を吸い込み、作家たちは表現や思想の完全な自由を感じたが、すぐさまその熱は冷めていった。その時、朝鮮半島をどう分割するかが問題となり始め、左翼か右翼かの間の意見の相違が現れる環境の中で、作家たちは神秘主義的なロマン派と、古びた象徴的な悲観主義へと後退してしまった。このようにして文学サークルは分断した状況であった。このような文学状況の中で15年後、金芝河が現れたのだった。

大江健三郎はこのような歴史的な事情には触れなかったが、しかし詩人の性格や彼のエクリチュールに特徴を与える社会的環境をとっても包括的なやり方で私たちに提示した。大江の言葉によって、私は金芝河の作品が持つ重要性を理解した。その重要性は投獄や死刑の原因になった政治的姿勢のみにあるのではなく、かつて存在していた朝鮮半島の技法的伝統、例えば「詩調」のような詩的ジャンルや、農民の伝統である朝鮮民謡的な表現や、仮面舞踊や人形劇の世界を救うことに彼の美的価値は置かれていたのだった。

このような芸術的伝統に身を置きながら、詩人は悲劇的かつ諷刺的なトーン

ンを交じり合わせた文体を作る。庶民が過去の行政エリートに発していた抗議の言葉とともに、独裁政権の「維新」体制を打ち出しながらも、労働者、農民、周縁化された人々の要求を抑圧し続けたからだ。それと同時に、大江は収容され死刑を宣告された詩人の国際委員会が作られつつあることを私たちに伝えた。

1976年の初旬に講座は終わった。私は日本の一人の作家が、民衆の苦しみと寄り添うことに自己を見出した韓国の詩人に純粋な興味を持っていることに感銘を受けた。彼の文学にのみ興味を持つことはなく、韓国で大きな位置を占める抑圧的な政治体制に対して、正当な抗議をもって支援するということをまた宣言したことが大江の素晴らしさである。

帰国の前に、大江は『飼育』のメキシコ版の出版講演をした。訳を担当したのは故オスカル・モンテス (Oscar Montes) だった。そして大江は私たちのもとを去っていった。『飼育』には大江が私に愛情深いサインをしてくれた。ほかの時には日本の出版社「Kangyosa」**から出された金芝河詩集のハンゲル版をプレゼントしてくれた。

1976年は韓国の民主化を支援するアクティビズムの時代だった。覚えているのは、2月の末、エル・コレヒオ・デ・メヒコ大学院大学の仲間だった田中道子がこう伝えてくれたことだ。人類学者のリカルド・フェレ (Ricardo Ferré) が大江も話していた金芝河救援国際委員会がすでになしてきた様々なことに、メキシコからも参加できるかどうか私たちと話がしたいと言ってきたという。

フェレは私たちに政治と文化の分野で世界的な名声を得た人々が数限りなく集まり、委員会を結成しているのだと告げた。彼らは韓国の民主化運動に賛同を示し、死刑宣告を受けた金芝河やその他の活動家の処刑延期および釈放を要求していた。構成員のすべての名前を挙げるのは冗長に過ぎるので、もっとも有名だった人々の名前を挙げるにとどめよう。ウィリー・ブランド (Willy Brandt), ノーム・チョムスキー (Noam Chomsky), ニコラ・ガイガー (Nicola Geiger), ルイ・マル (Louis Malle), ジョセフ・ニーダム (Joseph Needham), エドウィン・ライシャワー (Edwin Reichauer), ジャン・ポール・サルトル (Jean Paul Sartre), エドワード・ワグナー (Edward Wagner), ハワード・ジン (Howard Zinn) といった人のほかに、日本の委員会の人びとには、遠藤周作、小田実、大江健三郎、鶴見俊輔、宇井純が

た。

委員会は朴正熙大統領を弾劾する宣言を公のものとしていた。金芝河の詩的な声の中に表現された民衆の叫びに耳を傾けさせるためだ。金芝河は民主主義の旗を、韓国社会で繁栄を享受していない人々を保護するために掲げる旗をキリスト教信者の僕として高く掲げ、自身の確信に基づいて行動していた詩人だった。

この情報と金芝河のプロフィールを通じて、リカルド・フェレ、田中道子と私は知識人や芸術家サークルに広く伝え、私たちは韓国にあてた手紙を書いた。そしてメキシコでは様々なボランティアグループを通じてそれを流通させた。その中には署名集めに協力してくれたものもいた。UNAM の同僚たち、エル・コレヒオ・デ・メヒコ大学院大学の人びと、新設されたばかりのメトロポリタン大学 (UAM)、メキシコ国立人類学歴史学校の仲間たちだ。ほかのグループも芸術家や作家の署名を集めてくれた。私には 500 名を超える署名者の名前をすべて思い出すのは不可能だが、記憶に残っている著名人の名前を挙げてみよう。作家はフェルナンド・ベニテス (Fernando Benítez)、フワン・デ・ラ・カバダ (Juan de la Cabada)、カルロス・モンシバイス (Carlos Monsiváis)、ホセ・エミリオ・パチェーコ (José Emilio Pacheco)、オクタビオ・パス (Octavio Paz)、ホセ・レブエルタス (José Revueltas)、そしてフワン・ルルフォ (Juan Rulfo) だ。画家はヒルベルト・アセベス=ナバロ (Gilberto Aceves Navarro)、ルイス・ニシザワ (Luis Nishizawa)、音楽家の中ではバイオリン奏者の黒沼ユリ子などだ¹。

私たちが一度一步踏み出すと、大学の学生たち、宗教者たち、市民団体、

¹ [訳注] フェルナンド・ベニテス (1912-2000) ジャーナリストおよび編集者

フワン・デ・ラ・カバダ (1899-1986) 作家

カルロス・モンシバイス (1938-2010) 作家、文化批評家

ホセ・エミリオ・パチェーコ (1939-2014) 詩人、作家、批評家。2009 年、セルバンテス賞受賞。邦訳には『砂漠の戦い』(1981) (集英社, 1995)、『メドゥーサの血』(1977) (まろうと社, 1998) オクタビオ・パス (1914-1998) 詩人、批評家。1990 年ノーベル文学賞受賞。邦訳多数。

ホセ・レブエルタス (1914-1976) 作家、社会運動家。

フワン・ルルフォ (1917-1986) 作家。邦訳に『ベドロ・パラモ』(1955) (岩波書店, 1992) 『燃える平原』(1953) (書肆風の薔薇, 1990)

ヒルベルト・アセベス=ナバロ (1931-2019)、画家、造形作家。

ルイス・ニシザワ (1918-2014) 画家。1996 年メキシコ芸術科学国家賞受賞。

黒沼ユリ子 (1940-) バイオリン奏者。2007 年メキシコモーツァルトメダル受賞

とりわけメキシコのアムネスティ・インターナショナルの間で、民主主義の闘志たちに韓国政府がどんなに抑圧的な政策を施しているかの宣伝活動に入った。当時メキシコ・アムネスティ・インターナショナルの代表はマリクレール・アコスタ (Mariclaire Acosta) だった。私たちは田中道子がエル・コレヒオ・デ・メヒコ大学院大学で、リカルド・フェレがメキシコ国立人類学歴史学校で、元イエズス会の聖職者ポルフィリオ・ミランダ (Porfilio Milanda) が UAM で、博士課程の学生だったスガヌマ・マユミは UNAM の哲文学部で、ジャーナリストのフロイラン・ロペス＝ナルバエス (Froylán López Narváez) と私が UNAM の政治社会科学部と社会研究インスティテュートで、持ち回りの連続講座を行った。

1976年8月15日、朝鮮半島の光復節の日、1968年、メキシコ・オリンピックの年に韓国政府から寄贈された、チャプルテペック公園の森の中にある「ハングク・クリム」(한국그림: 韓国画の意) という朝鮮式の東屋で、UNAM および UAM の良き学生グループを集め、私たちは良心の捕囚たちのために献花をし、ポルフィリオ・ミランダとフロイラン・ロペス＝ナルバエスの手による敬意を示す演説が行われた。

1976年の12月15日、私たちは最後の活動をした。スガヌマ・マユミ、ポルフィリオ・ミランダ、フロイラン・ロペス＝ナルバエスと私が UNAM の政治社会科学部で、「韓国における政治犯への支援」と題したパネルセッションを行ったのだった。

しかしながら、私たちの政治犯支援活動への参加はここで終わったわけではない。この一連の活動は、当然の帰結として1977年、私たちはアジア太平洋資料センター (PARC) に招かれ、金芝河の人生と詩を基にしたオーディオビジュアル作品「しばられた手の祈り」のスペイン語版の翻訳への参加の打診を受けた。フローラ・ボトン (Flora Botton)、オスカル・モンテス、田中道子のエル・コレヒオ・デ・メヒコの教授陣と私で翻訳チームを組んだ。

この経験はとても豊かなものだった。なぜなら金芝河の詩的創作の方向性をより近くに感じ、また政治的な意味からだけでなく文学的な意味から彼の詩の重要性を理解できたからだ。私たちが渡されたテキストは英語で書かれたものだったため、朝鮮語の難所を問う必要性は私たちにはなかったが、その政治的な意味を無傷でいさせながらも、彼の詩のスタイルに明快さを与え

る必要性はあった。オスカル・モンテスが持つ文学的資質と彼の日本語文学の翻訳経験によって、できる範囲で金芝河の詩を適切に理解する枠組みを私たちは共有した。

私は担当した仕事の部分を日本へと発つ前に手渡した。1978年、私はアジア経済研究所の客員研究者として一年間のサバティカルを得ていたからだ。1979年にメキシコに戻ると、オーディオビジュアル作品が完成したとの知らせが届き、受け取るや否や大学の各所に配って回った。完成した作品を見、企画に参加した全員の名前がクレジットされるのを見ると、私はチームに参加したことの意義を誇らしく思った。翻訳の入念なチェックと当時日本に住んでいたスペイン人の聖職者、ハイメ・P・カスタニェーダ (Jaime P. Castañeda) によるテキストの音読は語りに響きを与えていた。黒沼ユリ子によって担当されたバイオリンによる音楽の理解も同様だ。

そして富山妙子の芸術的個性にも特に言及しておかなければならない。金芝河の詩にリトグラフを描いたこの芸術家は、私に深い印象を与えた。金芝河の歴史文化的なメッセージを確かに表現しており、全羅道の絶望的な風景や詩人が拘禁された精神状態、つまりそれは1970年代の韓国の社会状況を反映するのに影響を与えたものだけではなく、朝鮮芸術の伝統に重なったものを表現している。

私はそのころまで富山妙子の芸術家としての軌跡を知らなかったと告白しなければならない。彼女のリトグラフは、美を創造するだけでなく、芸術を革命と自由の大義のために使うことを方向性として持っていたメキシコのタジェール・デ・グラフィカ・ポプラー (Taller de Gráfica Popular / 民衆芸術工房) のことと重なっているように見えた²。彼らにとって芸術と政治とは近しく結びついたものであり、それはまた富山妙子のリトグラフにも明らかだ。彼女の美学は金芝河の詩の方向性と絡まりあい、また韓国の民主化にも賛同する政治参加の意図が絡んでいる。

最初に見た瞬間、私にはただ事ではない事態の一致に気が付いたが、それを説明する方法を持たなかった。しかし40年の距離を取り、富山作品について少し知る可能性や彼女のメキシコ訪問を知った。真鍋祐子博士のプロ

² [訳注] タジェール・デ・グラフィカ・ポプラー (民衆芸術工房) は、1937年に創作された版画家コレクティブ。

プロジェクトのおかげで、富山はメキシコに二回滞在していたことを知った。一度目は1962年、ナショナリスト画壇と呼ばれた壁画作品を勉強するためだった。この彼女が持っていた興味に対して、私が想起するのは、メキシコの民衆芸術工房に集まったグループの作品を彼女は知っていたのではないかという可能性だ。そのメンバーにはパブロ・オヒギンス (Pablo O'Higgins)、ホセ・チャベス＝モラード (José Chávez Morado) という壁画作家の中でも傑出した作家たちがいた³。

二度目の旅は1976年で、私たちが韓国の民主化支援の活動を行っているときだ。私たちは彼女と知り合う機会がなかったが、私が情報を得た限りその際の接待役は黒沼ユリ子で、同時に若いころダビッド・アルファロ・シケイロス (David Alfaro Siqueiros) の助手を務めていたヒルベルト・アセベス＝ナバロだった。1952年、そのころ彼はUNAMの学長棟の壁画制作を手伝っていた。アセベス＝ナバロは壁画運動にすべてをささげていたわけではなかったが、彼の広い作品の中にはアクリル画の壁画ともいえるいくつかの例がある。例えば「私はベトナムに歌う」という作品は1970年の大阪万博に出品された。

1976年の10月8日、富山はモレーロス州クエルナバカ市にあるイバン・イリイチによって創設された元CIDOC (文化間資料化センター) という、解放の神学の支持者たちが集まっていた場所で展覧会をする。富山はブラジルの農民運動の指導者で、当時メキシコに亡命していたフランシスコ・ジュリアンに招待され、黒沼ユリ子、リカルド・フェレ、ヒルベルト・アセベス＝ナバロに付き添われ、「しばられた手の祈り」のオーディオビジュアル作品の英語版を上映した。それを見ていた観客たちは、アルゼンチン、ブラジル、チリ、ウルグアイや中央アメリカからやってきた亡命者たちだった。メキシコシティで韓国の民主化支援をしていたグループに知らせるには難しかったのだろう。

最近、『ハーバード・パシフィック・レビュー』に掲載されたフランク・ホフマンによる「韓国民衆芸術における反抗のイメージ」という記事を見つ

³ [訳注] パブロ・オヒギンス (1904-1983) 画家、壁画作家。アイルランド系米国人だがメキシコ壁画運動を学ぶためメキシコにわたり、その地で活動を続ける。

ホセ・チャベス＝モラード (1909-2002) 画家、壁画作家、版画家。

けた。その中でホフマンは、富山妙子にはダビット・アルファロ・シケイロスの壁画をじっくりと観覧する機会があり、その中でリアリズムと失望を押し殺すような幻覚が現れる印象を受けたと語ったと書いている。

このテキストを読むと、私は富山妙子による韓国の民主化への芸術的参加が、初期のリトグラフ表現よりもより遠くへ行っていると理解した。そして、オーディオビジュアル作品である「しばられた手の祈り」はおそらく、韓国の民主化闘争およびその芸術的参加のごく初期のものだったのだろうと考えるに至った。1980年5月の光州事件の後、彼女はより創作的かつ参加的になったのだ。

数日前、私の書庫を調べてみると、一つの冊子を見つけた。それは「倒れた者への祈祷——1980年5月光州」と題されたものだった。それは富山の、韓国の民主化の息吹へより身を浸し、また韓国の芸術グループと時を同じくして発展し始めた壁画のような大きな次元へとリトグラフ作品を連れて行くような、違った技術を持ち込もうとする意図が見える新たな次元を切り開くものだった。

最後に、ホセ・エミリオ・パチェーコが金芝河の作品に寄せた興味について語っておこうと思う。彼はオーディオビジュアル的な創作素材を使ったことに触れ、創作にあたり暗示的にほかの出どころからの引用を用いていることを語り、またスペイン語へ翻訳された金芝河のいくつかの詩も使用していた。そのテキストは1980年、雑誌『プロセソ』の彼のコラム「インベントリオ」で発表されたものだ。

この手短なコラムが韓国の民主化運動にメキシコの知識人たちが連帯を示したことに気づくよい模範なのではないだろうか。金芝河の詩を知り、富山の芸術作品の意味を理解する機会をあらかじめ得たということは、韓国民衆の政治社会生活を変えた政治運動を理解することにも寄与したのではないか。

最後に、私は富山におけるメキシコの造形芸術がどれだけ影響を与えたのか、もっと細かく知りたいと考えている。文学と絵画には限界も境界もない。詩と造形芸術は物事の意味を理解するのに役立つ、またその意義を明らかにする力がある。富山にはメキシコの壁画運動の作家たちが表現した社会的正義のメッセージを受け取り、メキシコとは異なる歴史文化的現実へと移植することができた。富山は芸術的創作を、美を作り出すための道具とした

だけではなく、様々な浮き沈みにさらされたポストコロニアル社会や、社会の新たな在り方の道筋を探すということとといった、身の回りを取り囲む世界の意識のとらえ方を宣言するために使った。

この文章が金芝河と富山妙子への、敬意の表明となるように。またあの1976年になされた行動に参加したメキシコの人びとへの記録となるように。彼らの多くはもうこの世にいないのだから。

(翻訳 高際裕哉)

追記：編集責任者による訳注

- * 鄭仁燮（1905～83）は韓国の詩人、文芸評論家、英文学者。英語翻訳者として韓国詩の翻訳にも携わった。1929年に早稲田大学を卒業後、創作と評論活動始める。帰国後は新劇運動にも関心を寄せる一方、1932年に宋錫夏、孫晋泰などととも、韓国民俗学の嚆矢となる朝鮮民俗学会を創立した。解放後、ソウル大学、中央大学、韓国外国語大学の教授を歴任。
- ** 「漢陽社」のことだと推測される。1976・77年に金芝河全集刊行委員会名義で『金芝河全集』を刊行している。